

火の路地

—大阪大空襲三月十三日

大原 勝人

ウオーウ・ウオーウ

断続的に叫び続ける警鐘のサイレンが
未だ明けきれぬ兵舎の地軸を揺り動かす
呼応して非常起床のラッパが急を告げる
完全装備で営庭に整列した兵士

大阪府泉北郡信太山無線通信教育隊

昭和二十年三月入隊したばかりの初年兵達だ

西北の空を見ればそこは大阪市内

爆撃機B29が落とす油脂焼夷爆弾が

地上二〇〇mの所で更に四方に分裂して

垂直に落下する凄惨な花火の修羅の真只中だ

トラックで兵士達が被爆地に到着した時は

空爆も終わり街は燃え盛る火の海

誰人も近寄る事を拒絶する勢いの

ただ、ガラガラと焼け崩れる建物の他は

辺りは凄まじいサイレントの世界だ

極限の恐怖が音を消し去るのか

なぜか裸馬が一頭、火の中を走り抜ける

七、八歳ぐらいな男の子が四ツ身の着物の

前をはだけて泣けない口を歪めて

■ 詩の作者 ■

おおはら かつと

1926年、広島県に生まれる。1944年、三菱三原車輛青年学校卒業。1945年、無線通信兵として大阪信太山通信隊(陸軍)に入隊。1947年、三菱三原車輛従業員組合青年部書記長。1949年、国際新聞広島支局尾道駐在員記者。1951年、昭和パイプ従業員組合組合長。1967年、広島県府中市に栄進家具工芸を設立、現在に至る。

2007年、詩集『通りゃんすな』(コールサック社)。

広島県詩人協会会員、中四国詩人協会会員。詩誌「火皿」「衣」同人。広島県府中市在住。

人の助けの届かない火の路地に消えて行く
……彼の防空壕……ひとりの兵士が叫んだ
土饅頭の形をした壕の板戸の隙間から

水蒸気らしき物が漏れ出ている

兵士が駆け寄り板戸を叩き外す

ファーツと吹き出る湯煙

……生存者は居るか

問いかけにも応答は無い

太陽は舞い狂う黒煙に遮断されて地に届かず

街は溶鉱炉と化して紅蓮の炎を巻き上げる

自分達の役割は一体何であつたのか

帰途に就いた兵士達の表情はいずれも硬い

貴様ら見たか、あれが米英らの本性だ、我々には神風がついて
いる必ず吹くぞ、最後の勝利は大日本帝国我々にあり、

引率古兵の張り声に……おおーッ……

兵士達は反応して天に腕を突き上げる

それを屍目に敵艦載機グラマンが超低空で

炎の大阪へ凱歌の爆音を響かせて襲いかかる

それは更なる大阪大空襲への序曲であつた

大原勝人 詩集『泪を集めて』（コールサック社、2012年刊）より

▼表紙絵の作者▲



庄司 正
(しょうじ・ただし)

1916（大正5）年3月15日、山形県山形市小姓町に生まれる。山形中学校卒業。1938（昭和13）年、帝国美術学校（現・東京芸術大学）日本画科卒業。1941（昭和16）年12月、国学院高等学校を繰り上げ卒業。学生結婚をし、二男が生まれる。山形県立第二高等女学校に美術、歴史の教員として勤務。1942（昭和17）年、応召。1944（昭和19）年、南西太平洋ソロモン諸島のブーゲンビル島において戦死。享年28。